

UNSYNCHRONIZED

THEATER
COMMONS
TOKYO '22
UNSYNCHRONIZED
VOICES

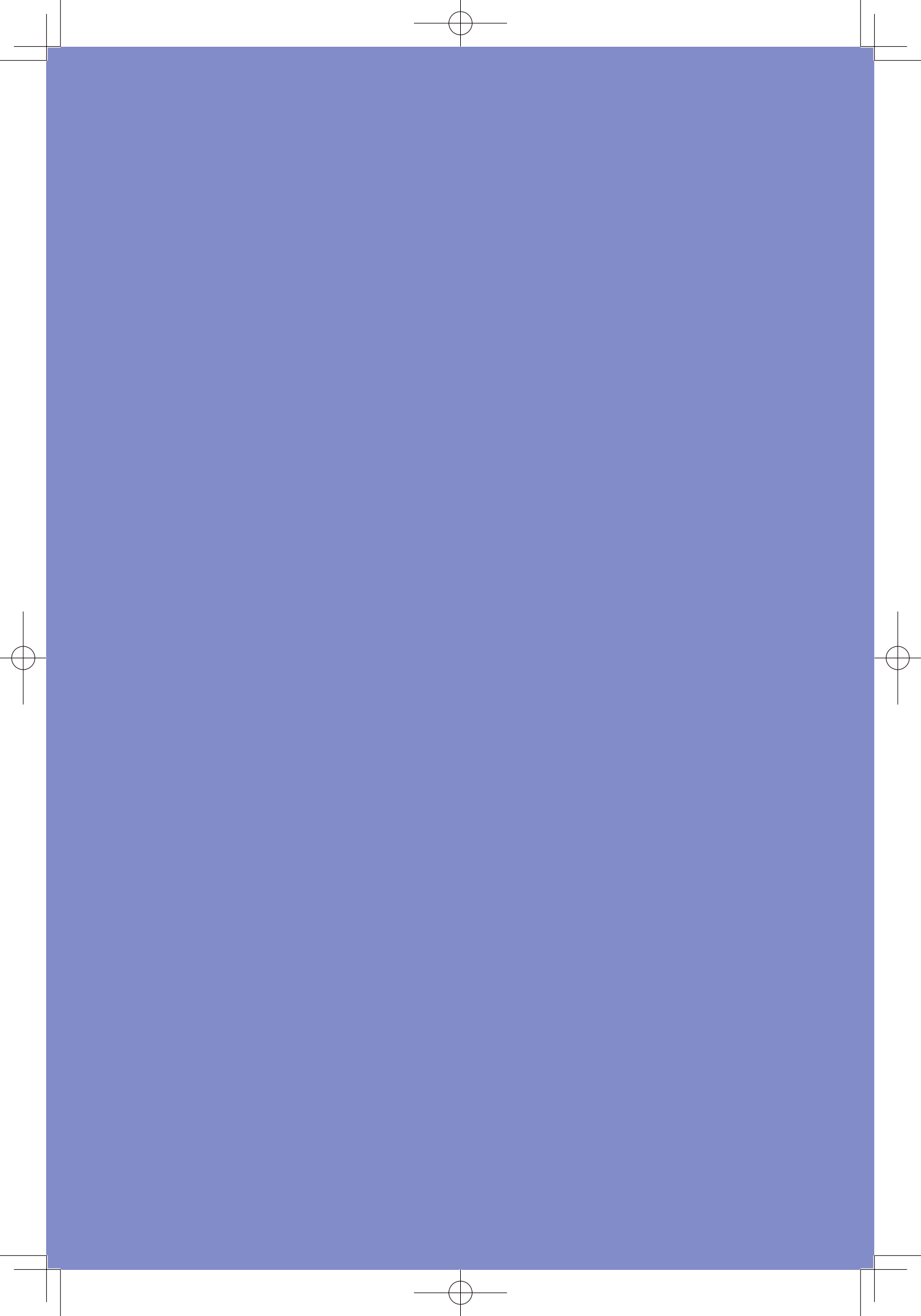
非

THEATER
COMMONS
TOKYO '22
UNSYNCHRONIZED
VOICES

VOICES

THEATER
COMMONS
TOKYO '22

同期



THEATER COMMONS TOKYO

シアターコモンズ'22

Kyun-Chome

Boogaerdt/
VanderSchoot
[the Netherlands]

Satoko Ichihara (Q)

Hsu Che-Yu [Taiwan]

Monira Al Qadiri
& Raed Yassin

[Kuwait, Lebanon / Germany]

Tomoko Sato

Reframe Lab

開催概要

都市にあらたな「コモンズ(共有地)」を生み出すプロジェクト、シアターコモンズ。
第6回目となる今回は、「非同期することばたち - Unsynchronized Voices」をテーマに、演劇公演、レクチャーパフォーマンス、体験型アート、ワークショップなど、リアルとリモートの両方で9日間にわたり開催します！

シアターコモンズは、演劇の「共有知」を活用し、社会の「共有地」を生み出すプロジェクトです。日常生活や都市空間の中で「演劇をつかう」、すなわち演劇的な発想を活用することで、「来たるべき劇場／演劇」の形を提示することを目指しています。演劇的想像力によって、異質なもののや複数の時間が交わり、日常を異化するような対話や発見をもたらす経験をアーティストとともに仕掛けていきます。

シアターコモンズは、港区内に拠点をもつ国際文化機関、台湾文化センター、ゲーテ・インスティトゥート東京、在日フランス大使館／アンステイチュ・フランセ日本、オランダ王国大使館とNPO法人芸術公社が実行委員会を形成し、「港区文化プログラム連携事業」として港区内を中心に展開します。

シアターコモンズ '22

会期

2022年2月19日[土]-2月27日[日]

会場

東京都港区エリア各所

主催

シアターコモンズ実行委員会
台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター
ゲーテ・インスティトゥート東京
在日フランス大使館／アンステイチュ・フランセ日本
オランダ王国大使館
特定非営利活動法人 芸術公社

共催

港区 港区文化プログラム連携事業

パートナー

SHIBAURA HOUSE

助成

令和3年度文化庁優れた現代美術の国際発信促進事業
公益財団法人セゾン文化財団
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
【大規模文化事業助成】



公益財団法人セゾン文化財団



ABOUT

A new collective space, a new “commons,” in the city: welcome to Theater Commons Tokyo. This sixth edition of Theater Commons Tokyo will be presented under the theme “Unsynchronized Voices.” Over the course of nine days, we will mount a packed program of in-person and online events including theater, lecture performances, experiential art, workshops, and more!

Theater Commons Tokyo is a project to create a collective space for society that harnesses the collective wisdom of theater. By using theater – that is, by applying theatrical ideas – in the context of everyday life and the urban space, it aims to propose a model for theater(s) to come. Theater Commons Tokyo and its artists use the imagination of theater to create experiences in which diverging elements and time periods intersect, and the ordinary is defamiliarized through dialogue and discovery.

Theater Commons Tokyo is held in venues across Minato ward as part of Minato City and Minato Cooperation Project for Cultural Program. The executive committee is composed of Arts Commons Tokyo and the following international cultural institutions based in the ward: Taiwan Cultural Center (Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan), Goethe-Institut Tokyo, Embassy of France in Japan / Institut français du Japon, and Embassy of the Kingdom of the Netherlands.

Theater Commons Tokyo '22

Date

February 19th - 27th, 2022

Venues

Various places in Minato ward, Tokyo

Organized by

Theater Commons Tokyo Executive Committee
Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan
Goethe-Institut Tokyo
Embassy of France in Japan / Institut français du Japon
Embassy of the Kingdom of the Netherlands
Arts Commons Tokyo

Co-organized by

Minato City and Minato Cooperation Project for Cultural Program

In partnership with

SHIBAURA HOUSE

Supported by

The Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2021, The Saison Foundation, Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture



THE SAISON FOUNDATION



目次

シアターコモンズ '22

page

02	開催概要
04	目次
06	キュレーション・コンセプト
13	プログラム
33	会場
34	スケジュール
36	クレジット

CONTENTS

Theater Commons Tokyo '22

page

03	About
04	Contents
09	Curatorial Concept
13	Programs
33	Venues
34	Schedule
36	Credit



非同期することばたち Unsynchronized Voices

相馬千秋

すでに3年目に突入したパンデミックは、世界中を「強制同期」し続けている。未知の変異株が出現する度に繰り返されるロックダウン、移動や集会の制限、国境の封鎖。新たに開発されるワクチンと、その供給量や速度をめぐる国家競争。その不均衡が増幅する、さらなる経済格差と生存をめぐる不平等。私たちはこれらに一喜一憂し、右往左往する。全世界を幾重にも覆うパンデミックの波は、人々の振る舞いや身振りを瞬時に書き換えてしまう最強の振付家のような。

さらにパンデミックによる「強制同期」は、社会の全体にも細部にもわたる管理を強化している。目に見えないウイルスを目に見える形で管理するため、あらゆる境界線に管理システムが張りめぐらされる。それは巧みに自動化され、即座にクラウド化される。病院や劇場の入り口で、空港の検疫で、私たちは自らの身体に関する情報を無条件に受け渡さなければ、最低限の権利を享受することさえできない。一度国境をまたいだ後の隔離期間には、GPS（グローバル・ポジショニング・システム）によって常に居場所が特定され、AIからの無言電話によって個人を特定する顔認識映像が吸い上げられる。これに同意しない、という選択肢は与えられない。

さらに恐ろしいのは、このようなコロナ全体主義ともいべき状況の中、人々の内面さえもいつの間にか「感染拡大防止」「コロナとの戦い」という物語に同期させられ、上書きされ、自動更新させられているという事態だ。それに違和感を覚えたとしても、管理されるオペレーション・システム自体を拒絶するオプションがそもそも与えられていない。ウイルスを管理するという名目で、人間や動物の生体を徹底的に管理していくシステムから、今私たちが自由にあることは不可能に近い。気がつけば自分自身も知らぬ間にシステムに操作さ

れ、他者の身体管理に加担し、全体主義を強化する一員となってしまう。

こうしたパンデミックがもたらす全体主義に亀裂を入れ、意識的に「非同期する」身振りとはどのようなものだろうか。強制同期の果てに単一の物語にまとめあげられてしまう声や語りを、意図的に非同期状態に戻すにはどうしたらいいか。強制同期の過程で削られ、振り回され、失調する心身を、芸術はいかにラディカルな方法でケアすることができるのか。今回のシアターコモンズではこうした問いのもと、パンデミックの強制同期をすり抜け、それぞれの戦略のもと「非同期することばたち」を編み上げ続けているアーティストとその作品を媒介に、この終わりなき困難な時代と向き合いたい。

強制同期をすり抜ける、 非同期的ドラマトゥルギー

ともに中東アラブ世界出身で、ベルリンを拠点に活動するモニラ・アルカディリとラエド・ヤシンは、エンドレスな待機状態における「宙吊りの感覚」を、不気味なロボット人形劇ともいえる演劇的インスタレーションで表現する。彼ら自身と飼い猫の頭部を模した3体のロボットは、長期間にわたり隔離空間で過ごしたコロナ禍の錯乱を、断片的かつ詩的に語り出す。この「宙吊りの狂気」は、今なお現在進行形でパンデミックに振り回され続ける私たちにいかなる攪乱作用をもたらすだろうか。ジェンダーをめぐる問いを深めながらアクションを続けるキュンチョメは、これまで男性たちによって書き記されてきた「世界の終焉」という大きな物語に対し、コロナ禍に関係なくサバイバルを強いられてきた女性

たちのナラティブを『女たちの黙示録』として編み直す。その語りは、予想外の方法で私たち観客の身体へと侵入し、未来の時間まで潜伏することになるはずだ。シアターコモンズ'21に続き東京・港区エリアという、過剰でつかみどころのない都市空間と対峙する佐藤朋子は今回、1957年に岡本太郎が書いた都市論「オバケ東京」を縦軸に、現在の東京を飛び回るカラスの視点を横軸に、自らの身体と声を媒介としたフィクション／レクチャーパフォーマンスを出現させることになる。

2年前のシアターコモンズ'20ではリーディング・パフォーマンスの戯曲として紹介し、その後2021年にスイス・チューリヒのノイマルクト劇場との共同制作によって実現した市原佐都子初の海外作品『Madama Butterfly』は、オミクロン株の急速な感染拡大の影響であえなく中止となってしまった。だが、共同招聘を計画していたロームシアター京都の協力のもと、同劇場が制作した『妖精の問題 デラックス』を、急遽シアターコモンズでも上演することになった。この作品は市原の20代の代表作であり、優生思想やルッキズムの根幹にある差別や偏見を、誰にも内在しうる葛藤として引き受けながら、あらゆる生を肯定し乗り越えようとするパワフルな音楽劇だ。ゴキブリや細菌といった生命にも戯画的かつ露悪的なまでに声を与えることで人間中心的な視点を破壊する市原の筆力が、今回新たに参加するパフォーマーたちの声によってどのように乱反射するのだろうか。

これらのアーティストたちがコロナ禍の「宙吊りの時間」をサバイブしながら編み上げた言葉は、男性と女性、人間と動物、人工と自然、内側と外側、正義と悪といった単純な二項対立を攪乱し、人間中心的な視座から編まれてきた物語や歴史に水を差すものだ。すべての差異

や個別性を奪うコロナ全体主義の強制同期システムに回収されない戦略として、こうした非同期的ドラマトゥルギーがいかに生成されるのか、コモンズ・フォーラムにおいて横断的な議論も展開したい。

また今回のシアターコモンズでは、2つの中期的なリサーチに基づくプロジェクトを始動させる。オランダを拠点に領域横断的な創作を行うボーハルト／ファン・デル・スホートは、「Incubation」をテーマに、古代文明から現代のTikTok上のユースカルチャーに至るまで、古今東西のヒーリング実践をフェミニズムの地点から読み解き直す膨大なリサーチを展開する。さらには日本・アジアからのインプットや対話を通じて、パンデミック時代の治癒儀礼演劇の可能性を提示することになるだろう。マルチメディア・テクノロジーを活用し新たな映像表現を開拓する台湾の新世代アーティスト、シュウ・ツェユーは、彼が創作のモチーフとして取り組んでいる、動物と人間の関係性、個人と共同体におけるメディアと記憶の関係性をめぐるリサーチを始動させる。他所の人間だけでなく動物をも飼い慣らしてきた近代／コロニアリズムの歴史を経由しつつ、人間中心主義をずらす創作に向けた旅路が始まる。これらのプロジェクトは筆者がプログラム・ディレクターを務めることになった世界演劇祭 テアター・デア・ヴェルト2023（2023年6月末～7月上旬にドイツのフランクフルト市およびオッフェンバッハ市で開催予定）でのアウトプットを目標に、シアターコモンズ'21「Bodies in Incubation 孵化/潜伏するからだ」から続く問いをさまざまに変奏しながら、パンデミック時代の芸術的応答として温めていくことになる。

さらに今回はじめて、アート、教育、医療、福祉をつなぐプラットフォームReframe Labとともに「名もなきあそび」を生み出すワークショップを共同開発する。自ら

Curatorial Concept

Unsynchronized Voices

Chiaki Soma

Fast entering year three, the pandemic continues to forcibly synchronize the world. Lockdowns, limited mobility, restricted gathering, and closed borders repeatedly follow the emergence of an unidentified variant. Nation-states compete over newly developed vaccines, their supply and distribution speed. Economic disparities and inequality are further compounded. We waver between hope and anxiety, muddled in confusion. Submerging the entire world, the pandemic's endless waves are akin to an omnipotent choreographer with the power to instantly overwrite our behaviors and gestures.

The pandemic's synchronization also narrows societal control measures from the macro to the micro. To render the management of an invisible virus visible, systems of control are placed at every imaginable border. They are deftly automated and instantaneously uploaded to the cloud. At hospitals, theaters, and airports, we unconditionally relinquish our biomedical information just to receive basic human rights. Upon returning to Japan, we enter a quarantine where a GPS constantly tracks our location, and AI video calls capture our facial recognition data in silence. There is no choice but to consent.

What's more horrifying is that amid a situation we might dub coronavirus totalitarianism, the narratives of "preventing the spread" and "fighting COVID-19" have unknowingly synchronized, overwritten, and auto-updated our minds. Even if we feel at odds with this state, we cannot opt-out of the operating system that manages us. The system meticulously controls the bodies of humans and animals in the name of virus containment; it is now nearly impossible for us to break free. Before we realize it, we will all be manipulated by this system, made complicit in its management of other people's bodies,

upholding its totalitarianism.

Forced synchronization consolidates our voices and stories into a single narrative — how do we will them back to their original states? What could a conscious unsynchronized gesture to unfurl the fissures in this tyranny look like? How can the arts care for bodies — damaged, worn, and broken through forced time — in radical ways? Beginning with these questions, Theater Commons Tokyo '22 attempts to use the various unsynchronized voices created by these artists and their works to escape the pandemic's synchronization — to face these endlessly challenging times.

Unsynchronized dramaturgies that elude forced synchronicity

Monira Al Qadiri and Raed Yassin, both Berlin-based and from the Middle East, embody the sensation of waiting in an endless limbo through a theatrical installation that serves as an uncanny robot-puppet-theater. Three robots, modeled off the two artists and their pet cat, fragmentally and poetically narrate states of derangement from the long quarantine periods. How will this suspended delirium unsettle us as we continue to remain at the mercy of the pandemic? Kyun-Chome continues to engage in "actions" that deepen questions around gender, countering grand narratives of "the end of the world" written by men with *The Apocalypse of Women*, which assembles narratives of women forced to survive both in and out of a pandemic. Their stories will invade the audience's bodies in unexpected ways, likely remaining dormant inside us for some time to come. Continuing from Theater Commons Tokyo '21, Tomoko Sato confronts Tokyo's Minato

の身体が変容・変身する物語の力や、それを遊びとして組み立て共有する楽しさなどを引き出し、内なる抽象世界を互いに受け止め合う。このプロセスはまさに、「変身」という演劇の原初的な知を活用した遊びであり、演劇のコモンズ（共有知）の活用として今後さらなる展開が期待される。

「待機の時間」の中で

2年を超えて続くコロナ禍。過去から未来に向かって線的に進むと考えられていた時間が、気がつけば何度も振り出しに戻って円環を描く。こうして2年以上、私たちは幾度となく延期され、未達のまま先延ばしされる未来を待ち続ける「宙吊りの時間」を生きている。この文章を書いている2021年末から2022年始にかけても、一度動き出した海外と日本との往来は、オミクロン株の拡大による外国人入国停止措置によって、コロナ初期の2年前に逆戻りしてしまった。その結果、招聘を予定していた市原佐都子（Q）とノイマルクト劇場共同制作作品『Madama Butterfly』と、中国の振付家ウェン・ホイによる『I am 60』を、急遽12月上旬の段階で中止せざるを得ない状況となった。また来日を予定していたボーハルト／ファン・デル・スホート、およびシュウ・ツェユーも、リサーチ過程も含めすべてオンラインに切り替えざるを得ない事態となった。ここに記載しておかなければ「なかったこと」として消えていってしまう未遂の企画たちが、今後もどんどん積み重なっていく状況を、今はただ受け止めるしかない。

私たちはいまだに「待機の時間」のループの中にいるのか。いやそれとも、もともと時間はこのように直進

せずに円環を繰り返すものだったのだろうか。それすらもわからなくなっていくほど、いまだ時計は狂ったまま、世界中を強制同期し続ける。今はただ、その強制力をすり抜けながらサバイブする術を、演劇的な知と思考によって模索するしかない。シアターコモンズは、この困難な時代を生き抜く芸術の実践の場として、仮設的に東京に出現するコモンズ＝共有地である。今回も過去2回に続きコロナ禍中での開催となるが、リアルとリモート、それぞれに可能な形でご参加いただければ幸いである。

プロフィール

相馬千秋（そうま・ちあき）| シアターコモンズ実行委員長兼ディレクター（2017-現在）。NPO法人芸術公社代表理事。アートプロデューサー。演劇、現代美術、社会関与型アート、VR/ARテクノロジーを用いたメディアアートなど、領域横断的な同時代芸術のキュレーション、プロデュースを専門としている。フェスティバル／トーキョー初代プログラム・ディレクター（2009-2013）、あいちトリエンナーレ2019および国際芸術祭あいち2022パフォーミングアーツ部門キュレーター。2015年フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエ受章、2021年芸術選奨（芸術振興部門・新人賞）受賞。2021年より東京藝術大学大学院美術研究科准教授。2023年にドイツで開催される世界演劇祭アター・デア・ヴェルト2023のプログラム・ディレクターに就任。

ward, an excessive and elusive metropolitan space. In a fictional story/lecture performance using her body and voice, she intersects Taro Okamoto's 1957 urban treatise *Ghost Tokyo* with the perspective of the crows that adorn Tokyo's sky.

Madama Butterfly, Satoko Ichihara's first international project, began as a reading performance for Theater Commons Tokyo '20. The piece was then staged and co-produced by Theater Neumarkt in Zurich, Switzerland, but was canceled due to the rapid spread of the omicron variant. However, TCT will present a last-minute staging of *The Question of Faeries (Deluxe Edition)*, a play produced and shown at ROHM Theater Kyoto, who also co-sponsored *Madama Butterfly*. A seminal work of her 20s, this powerful piece of music theater positions discrimination and prejudice, the root of eugenics and lookism, as latent struggles in each of us. It attempts to overcome them by affirming all forms of life. Ichihara's writing destroys the anthropocentric perspective by giving voice to beings such as cockroaches and bacteria in an explicit and realistic manner. How will the voices of the new performers bring her text to light?

As these artists survive the in-between time of the pandemic, the words they paint disrupt simple binaries such as man and woman, human and animal, artificial and natural, inside and outside, justice and evil; they throw a wrench into narratives and histories compiled from an anthropocentric view. Through our Commons Forum, we hope to engage in cross-disciplinary discussions on how to create unsynchronized dramaturgies to defend against coronavirus totalitarianism and its systematic annihilation of all differences and individualities.

Additionally, TCT '22 launches two mid-length

research projects. Boogaerdt/VanderSchoot, based in Holland and known for their interdisciplinary creations, will develop a large-scale research project on "incubation," found in feminist reinterpretations of healing practices past and present, east and west, from ancient civilizations to contemporary TikTok youth culture. Through dialogues and discussions with Japan and other parts of Asia, the work will present possibilities for ritualistic healing theater in the pandemic era. Taiwanese artist Hsu Che-Yu represents the upcoming generation with his pioneering videos that utilize multimedia technology. His research will focus on his artwork's motifs, including the relationship between humans and animals and the relationship between media and memory, both individual and collective. Through the history of modernity and colonialism, which included the domestication of people and animals, we begin a journey towards creation that eschews anthropocentrism. Each of these projects aims to present at Theater der Welt 2023 (scheduled to be held from the end of June to mid-July 2023 in Frankfurt and Offenbach, Germany) — where I have been appointed as Program Director — building on questions from TCT '21 "Bodies in Incubation" and brewing artistic answers within the pandemic era.

This year, we will also co-develop a workshop to create "nameless games" with Reframe Lab, a platform that brings together art, education, medical care, and social welfare. The workshop brings out the power of body-transforming narratives and the joy of sharing them in structured games to help us learn how to accept each other's inner abstract worlds. This process offers a form of play utilizing metamorphosis — one of theater's primordial forms of wisdom

— and encompasses great potential to further develop into a theater commons, a shared understanding.

Amid "Wait Time"

The coronavirus crisis has gone on for more than two years. We find that time, once thought to progress linearly from past to future, has formed a circle, repeatedly returning to its starting point. For over two years, we have been continually postponed, living in suspended time as we wait, unable to realize our goals in a future deferred. As I write this text between the end of 2021 and the beginning of 2022, Japan has, once again, banned foreign entries. Travel between Japan and abroad, which had momentarily resumed, has reverted to its state at the beginning of the pandemic due to the spread of the omicron variant. As a result, in early December, we were forced to hastily cancel our plans to invite *Madama Butterfly*, co-produced by Satoko Ichihara (Q) and Theater Neumarkt, and *I am 60* by Chinese choreographer Wen Hui. We had also planned to fly out Boogaerdt/VanderSchoot and Hsu Che-Yu, but instead, we had to move everything online, including their research processes. Unless I make sure to write them down here, our attempted plans will disappear as things that never happened; for now, we can only accept the fact that attempts like ours will continue to accumulate.

Are we still stuck in a "wait time" loop? Or was time in fact cyclical to begin with? Our understanding blurs as the clock continues to chime at the wrong hour, forcing the whole world to synchronize. All we can do now is explore strategies to evade and survive its coerciveness through theatrical knowledge and ideas. TCT is a

temporary commons site in Tokyo for engaging in art practices to help us overcome this trying era. As with the past two years, we will host the festival during the pandemic — we hope you will join us in whichever way possible, in body or online.

Profile

Chiaki Soma | Before establishing Arts Commons Tokyo in 2014, Soma was the inaugural Program Director of Festival/Tokyo, where she served from spring 2009 to 2013. She has produced or curated global projects that transect categories of theater, contemporary art, and community-engaged art. She was the recipient of the Chevalier de L'Ordre des Arts et des Lettres from France's Minister of Culture in 2015. Since 2017, she has served as the Chairperson of the Theater Commons Tokyo Executive Committee, as well as its Director. She was the Curator for the Aichi Triennale 2019. She is the recipient of Japan's Agency for Cultural Affairs' 71st Minister of Education, Culture, Sports, Science & Technology's Art Encouragement Prize in 2021. Since 2021, she has been the General Producer of Toyooka Theater Festival 2021, and the Curator of Aichi Triennale 2022. She was appointed as the Program Director of Theater der Welt 2023 in Germany.

PROGRAMS



キュンチョメ Kyun-Chome

配布型作品

リモート参加有

Distributed Artwork

Online participation

女たちの黙示録 The Apocalypse of Women

日時

2月19日 [土] - 2月27日 [日]

*作品の受け取り後はお好きな場所、お好きなタイミングで3月31日 [木] 23:59まで鑑賞いただけます。

会場

郵送、シアターコモンズプログラム各実施会場にて配布

*送料無料。発送対象は日本国内限定となります。海外の場合は、異なる形態での参加をご案内いたしますので、事前に事務局までお問合せください。

参加方法

要予約

パス（コモンズパス・リモートパス）購入後に、郵送またはシアターコモンズプログラム各実施会場での受け取りを指定してご予約ください。

*予約受付期間：1月21日 [金] - 2月27日 [日]

- 定員数に達し次第、上記期間中に申込受付を終了することもあります。ご了承ください。

*会場配布について

- 受け取り希望日時を、申込フォームにてご指定ください。

- 当日受付にて申込フォームの回答コピーをお見せください。

Dates

February 19th [Sat]-27st [Sun]

*Upon reception of the work, you may enjoy it at the time and place of your choosing until 23:59 on Thursday, March 31st.

Venue

Distributed through mail, or at any of the venues for other Theater Commons Tokyo programs.

*Free shipping. Shipping is limited to Japan. Alternate participation options are available for overseas audiences; please inquire with us in advance.

How to participate

Booking essential.

After purchasing your pass (Commons or Online), please indicate on your reservation whether you will receive the piece via mail or pickup.

*Reservations open: January 21st-February 27th, 2022

- Please note that booking will close if capacity is reached.

*Pickup at venue

- Please note on your application form the day you wish to pick up the piece.

- When you arrive at the venue, please present a copy of your form.

女性たちの集合的な声がつむぐ「世界の終焉」。 コロナ禍の身体に侵入する予言に耳を傾けよ。

The end of the world, as painted by the collective voices of women:
listen to the prophecies that invade our pandemic-stricken bodies.

自らの嗅覚と欲望に従ってリサーチ、対話、アクションを繰り返しながら、その対象の最もコアな現実に入り込んでいくアーティストユニット、キュンチョメ。近年ではフェミニズムに焦点を当てた制作も精力的に行っている。

本作『女たちの黙示録』では、さまざまな世界の終焉が描かれる。世界の終焉はこれまでに神話や予言（預言）の書、SFなどで描かれてきたが、それらのほとんどは男たちによって書き記されたものだった。では今、女たちが「世界の終わり」を予言するとしたら、どんな終焉が描かれるのだろうか。本作ではキュンチョメが異なる立場や背景を持つ女性たちの声に耳を澄ませ、そこから生み出された予言が、観客へと配布される。その語りは、予想外の方法で私たち観客の身体へと侵入し、未来の時間まで潜伏することになるはずだ。

Following their keen intuitions and inclinations, artist unit Kyun-Chome engages in a series of research endeavors, dialogues, and “actions” to cut to the core reality of their subjects. In recent years, they have turned their energies toward producing work with a focus on feminism.

This piece, *The Apocalypse of Women*, depicts the ends of various worlds. While the end of the world has long appeared in myths, predictions (prophecies), science fiction, and so on, most of these stories have been written by men. If women, then, were to predict the end of the world, what would it look like? In this piece, Kyun-Chome listens to the voices of women with different perspectives and backgrounds, relaying the resulting prophecies to their audience. These narratives will invade the audience’s bodies in unexpected ways, laying dormant within us until some future time.

上演言語

日本語

Language

Japanese

クレジット

構成・演出 | キュンチョメ

協働者 | さまざまな職業や立場の女性たち

助成 | 2021年度一般財団法人川村文化芸術振興財団 ソーシャル・エンゲイジド・アート支援

一般財団法人
川村文化芸術振興財団

Credit

Concept and direction | Kyun-Chome

Collaborators | Women of various professions and positions

Supported by Kawamura Arts and Cultural Foundation Socially Engaged Art Support Grant FY2021

一般財団法人
川村文化芸術振興財団

プロフィール

キュンチョメ | ホンマエリとナブチの二人によって結成されたアートユニット。これまで福島、石巻、沖縄、香港、ベルリンなど、社会の分断を抱えた地域での活動を、主に映像インスタレーションとして発表。科学や論理を超えてなお人々が信じようとする「現代の信仰」の対象を探り、そこに渦巻く感情や真実をあぶり出す作品群は、加害者と被害者、当事者と非当事者、善と悪の境界線を揺さぶり、詩的かつユーモラスに異次元へと昇華させる。あいちトリエンナーレ 2019では性的マイノリティ（トランスジェンダー／ノンバイナリー）の人々と協働作業を行い、生きづらさや親子の葛藤などを描いた『わたしは世治』や『声枯れるまで』を発表した。

Profile

Kyun-Chome | Kyun-Chome is an artist unit comprised of the female-male duo Eri Homma and Nabuchi. They have created work, mainly in the form of video installation, in socially divided areas such as Fukushima Prefecture, Ishinomaki City, and Okinawa Prefecture, as well as in Hong Kong and Berlin. Kyun-Chome investigates the object of modern faith, which people seek out despite its transgressions of science and logical reasoning. Realized by way of unveiling this faith’s underling emotions and truth, their body of work blurs the boundaries between perpetrator and victim, parties involved and disinterested, and good and evil, poetically and humorously sublimating them. For Aichi Triennale 2019, they engaged with sexual minorities such as transgender and non-binary, and created work called “I’m Sage” and “Until My Voice Dies” which describe the hardness to live in the Japanese society and the conflicts between parents and children.





Image: Rodrik Biersteker

ボーハールト／ ファン・デル・スホート [オランダ] Boogaerdt/VanderSchoot [the Netherlands]

動かない旅 TRAVELING WITHOUT MOVING

日時

2月19日 [土] 19:00-21:00

Date

February 19th [Sat] / 19:00-21:00

上演時間

120分
前半 | レクチャーパフォーマンス上映
後半 | アーティスト・トーク (モデレーター | 岩城京子)

Performance times

120 min.
Part 1 | Lecture performance screening
Part 2 | Artist talk (Modelator | Kyoko Iwaki)

会場

オンライン

Venue

Online

参加方法

パス購入後に送付される専用ページ掲載のURLより
アクセスしてください

How to participate

Please access the program via the link on the dedicated
page sent upon purchase of your pass.

レクチャーパフォーマンス

リモート参加のみ

Lecture Performance

Online-only event

睡眠と夢見による治癒＝インキュベーション。 来るべきヒーリング演劇を予告する、オンライン・レクチャーパフォーマンス。

Sleep and dreaming as incubation, curative transformation
— an online lecture performance teasing healing theater.

オランダを拠点に活躍するアート・ユニット、ボーハールト／ファン・デル・スホート。20年にわたり舞台芸術・視覚芸術・社会実験の境界をラディカルに越境するパフォーマンスで、大胆な芸術的実践を続けている。2021年夏のオランダ・フェスティバルでは、「夢見による治癒＝インキュベーション」にフォーカスし、30体の人形とそのケアラーが展開する儀式としてのヒーリングパフォーマンスを制作、話題を集めた。

今回シアターコモンズからの委嘱を受け、インキュベーションをテーマとしたオンライン・レクチャーパフォーマンスを創作・発表する。古代文明から現代の若者文化に至るまで、古今東西のヒーリング実践をフェミニズムの地点から読み解き直す、膨大なリサーチを展開。さらには日本やアジアからのインプットや対話を通じて、パンデミック時代の治癒儀礼演劇の可能性を提示する。

上演言語

レクチャーパフォーマンス上映 |
ライブ配信：日本語
アーカイブ配信：日本語・英語
アーティスト・トーク | 英語 (日本語通訳つき)

Language

Lecture performance screening |
Live streaming: Japanese
Archive: Japanese and English
Artist talk | English (with Japanese interpretation)

クレジット

演出 | スザン・ボーハールト、ピアンカ・ファン・デル・スホート
音声 (日本語) | 樺山智子 (Art Translators Collective)
音声 (英語) | スザン・ボーハールト
映像 | UBERNERD
音響 | レムコ・デ・ジョング、フロレンティン・ボーデンダイク
ドラマツルク | 岩城京子
テキスト | ピアンカ・ファン・デル・スホート
翻訳 | 山田カイル (Art Translators Collective)
通訳 | 田村かのこ (Art Translators Collective)
助成 | オランダ王国大使館

Credit

Direction | Suzan Boogaerdt, Bianca van der Schoot
Japanese voice | Tomoko Momiyama (Art Translators Collective)
English voice | Suzan Boogaerdt
Visuals | UBERNERD
Sound | Remco de Jong, Florentijn Boddendijk
Dramaturg | Kyoko Iwaki
Text | Bianca van der Schoot
Translation | Kyle Yamada (Art Translators Collective)
Interpreter | Kanoko Tamura (Art Translators Collective)
Supported by the Embassy of the Kingdom of the Netherlands

プロフィール

ボーハールト／ファン・デル・スホート | スザン・ボーハールトとピアンカ・ファン・デル・スホートによるアーティスト・ユニットとして、1999年より活動開始。オランダのバントマイムの伝統を受け継ぎつつ、人間、自然、テクノロジーの関係を軸に作品を創作。複数の芸術分野を交差させながら、フィジカルな集まりや身体性を重視した作品群で美術館や劇場空間にラディカルな問いを投げかけ、場のルールや慣習を拡張している。彼女らの創作は、今日のメディア主導の世界で人々が直面する闘争と課題への問いかけであり、社会変革の実践でもある。ヴェネチア・ビエンナーレ2017演劇部門やルール・トリエンナーレ2015といった国際的シーンでの作品発表を行う他、美術館やオルタナティブスペースでも精力的に活動。より住みやすい未来へ向けて、人間とは何かという固定観念を問い直し、未来のための空間をつくることを試みている。

Profile

Boogaerdt/VanderSchoot | The work of the artist-duo Boogaerdt/VanderSchoot revolves around the relation between humankind, nature, and technology. They create liminal spaces in which the homo digitalis can train its bodily perception so as to engage with new (virtual) worlds coming into existence. Boogaerdt/VanderSchoot's work lends itself to the grey space, a zone between the black box and the white cube, stretching both theatrical and museal rules and conventions. After an exploration of image culture in the Visual Statements-series (2011-2014), they continued their artistic research on digital creatures in a non-human era in the Future Fossils-series, and are now developing a new series titled "Rooms for Transformation" (2021-2024). Attempting to make space for the future, Boogaerdt/VanderSchoot questions the fixed idea of what is human so as to transition towards a more livable future.



Photo: Willem de Kam



市原佐都子(Q) Satoko Ichihara (Q)

妖精の問題 デラックス The Question of Faeries (Deluxe Edition)

日時

2月20日 [日] 16:00
2月21日 [月] 18:00
2月22日 [火] 13:00/18:00
2月23日 [水・祝] 14:00

上演時間

約130分

会場

リーブラホール
〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦 1F

参加方法

要予約・コモンズパス提示
*推奨年齢中学生以上
*本公演では靴をぬいでご入場いただく予定です。

上演言語

日本語

演劇公演

Theater

Dates

February 20th [Sun] / 16:00
February 21st [Mon] / 18:00
February 22nd [Tue] / 13:00/18:00
February 23rd [Wed] / 14:00

Performance times

Approx. 130 min.

Venue

Libra Hall
1F Minato Park Shibaura, 1-16-1 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 105-0023

How to participate

Booking essential. Show general admission pass on entry.
*The performance is suitable for over junior high school students.
*In this performance, you will be asked to take off your shoes.

Language

Japanese

人間の生・性を問い直す、市原佐都子の代表作『妖精の問題』が 新たな創作メンバーとともに生まれかわる“デラックス”版。

Reborn in a “deluxe edition” with new creative collaborators, Satoko Ichihara’s masterpiece *The Question of Faeries* challenges our ideas of human life and sexuality.

人間の生と性に関わる違和感を大胆かつ緻密に描く劇作家・演出家の市原佐都子。今回、自身の代表作のひとつである『妖精の問題』をロームシアター京都製作により再創作、京都での初演ののちシアターコモンズにて東京初上演する。

『妖精の問題』は、2016年に起きた相模原障害者施設殺傷事件をきっかけに、市原が自身のなかに存在する優生思想や日本社会での生き辛さを直視し創作された作品だ。そこには「できるだけ偽善的でない方法であらゆる生を肯定する」という試みがこめられている。彼女の鋭い筆致は、社会の中で私たちが意識的／無意識的に目を逸らしている差別や偏見を、執拗にえぐり出し観客に突きつける。

初演ではひとりの俳優が演じた登場人物を、今回は再創作にあたってオーディションで選出された7人の俳優が演じる。新たなキャストと多彩なスタッフを交え“デラックス”版として生まれかわる本作は、コロナ禍によって社会の歪みが顕在化する今、私たちにどのように響くのだろうか。

クレジット

作・演出 | 市原佐都子
出演 | [第一部] 朝倉千恵子、筒井祐奈子 [第二部] 大石英史、キキ花香 [第三部] 廣川真菜美、富名腰拓哉、緑ファンタ
音楽 | 額田大志 (東京塩麹 / ノストミック)
演奏 | 秋元修、石垣陽菜、高橋佑成、額田大志
舞台美術 | dot architects
衣裳 | 南野詩恵
照明 | 魚森理恵 照明オペレーター | 加藤泉
音響 | 稲荷森健 音響助手 | 濱田夢花
映像 | 小西小多郎
舞台監督 | 川村剛史 (ロームシアター京都)
ドラマツルグ | 木村寛 演出助手 | 山田航大
制作 | 眞鍋隼介、木原里佳 (ロームシアター京都)
宣伝美術 | 吉岡秀典 (セブテンバー・カウボーイ)
イラスト | 狩野岳朗
製作 | ロームシアター京都 ロームシアター京都 レパートリー作品

[東京公演]

舞台協力 | 株式会社ステージワークURAK
会場協力 | 港区

プロフィール

市原佐都子 (いちばら・さとこ) | 劇作家・演出家・小説家・城崎国際アートセンター芸術監督。1988年大阪府生まれ福岡県育ち。桜美林大学にて演劇を学び、2011年よりQ始動。人間の行動や身体にまつわる生理、その違和感を独自の言語センスと身体感覚で捉えた創作、演出を行う。2011年、戯曲『虫』にて第11回AAF戯曲賞受賞。2019年「バックスの信女 ― ホルスタインの雌」にて第64回岸田國士戯曲賞受賞。2021年、ノイマルクト劇場 (チューリヒ) と共同制作した『Madama Butterfly』をチューリヒ・シアター・スペクタクル、ミュンヘン・シュビラート演劇祭にて上演。公益財団法人セゾン文化財団セゾン・フェロー。

Satoko Ichihara is a playwright and director who boldly and elaborately depicts feelings of unease around human life and sexuality. For this program, she will present a ROHM Theatre Kyoto-produced recreation of one of her major works, *The Question of Faeries*, which will show for the first time in Tokyo at TCT'22 following its Kyoto premiere.

Inspired by the 2016 Sagami-hara stabbings, *The Question of Faeries* was created by Ichihara to confront her own eugenicist biases, the intense pressures of living in Japanese society, and other related issues. The piece acts as an attempt to “affirm all life as un hypocritically as possible.” In sharp brushstrokes she confronts the audience with relentless revelations of the societal discrimination and prejudices from which we consciously/unconsciously avert our eyes.

Where the premiere featured a single actor, this production will showcase seven (selected by auditions held specially for the recreation). Reborn in a “deluxe edition” with a new cast and diverse staff, how will this work affect us in a time when the coronavirus has made tangible the imbalances in our society?

Credit

Text and direction | Satoko Ichihara
Cast | [Part I] Chieko Asakura, Kanako Tsutsui [Part II] Eiji Oishi, Hanaka Kiki [Part III] Manami Hirokawa, Takuya Funakoshi, Fanta Midori
Music | Masashi Nukata (Tokyo Shiokouji / Nuthmique)
Music performance | Shu Akimoto, Haluna Ishigaki, Yusei Takahashi, Masashi Nukata
Set design | dot architects
Costume | Shie Minamino
Lighting | Rie Uomori Lighting operator | Izumi Kato
Sound | Takeshi Inarimori Sound assistant | Yumeka Hamada
Video | Kotaro Konishi
Stage manager | Takeshi Kawamura (ROHM Theatre Kyoto)
Dramaturge | Satoru Kimura Direction assistant | Kota Yamada
Management | Shunsuke Manabe, Rika Kihara (ROHM Theatre Kyoto)
Flyer design | Hidenori Yoshioka (September Cowboy)
Illustration | Takero Kano
Produced by ROHM Theatre Kyoto ROHM Theatre Kyoto Repertory Works

[Tokyo Performance]

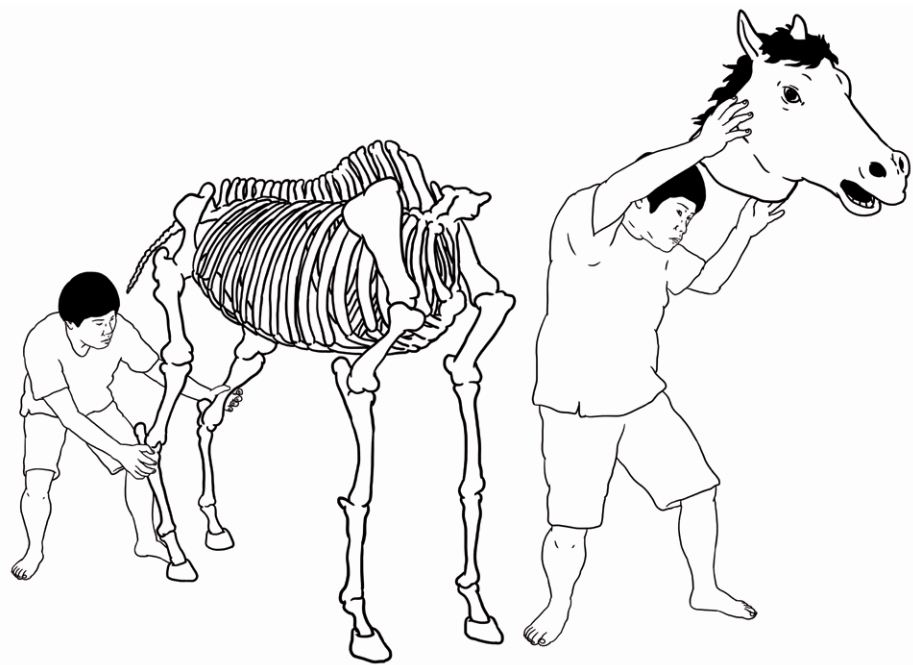
Stage support | URAK
Venue support | Minato City

Profile

Satoko Ichihara | Playwright, director, novelist and Artistic Director of Kinosaki International Arts Center (KIAC). Born in 1988 in Osaka, raised in Fukuoka Japan. Studied theater at J.F. Oberlin University. Ichihara Satoko has led the theater company Q since 2011. She writes and directs plays that deal with human behavior, the physiology of the body, and the unease surrounding these themes, using her unique sense of language and physical sensitivity. In 2011, received the Aichi Arts Foundation Drama Award with the play “Insects.” In 2019, “The Bacchae—Holstein Milk Cows” based on a Greek tragedy won the 64th Kishida Kunio Playwriting Prize. In 2021, she co-produced “Madama Butterfly” with the Theater Neumarkt (Zurich), which was presented at the Zurcher Theater Spektakel and the SPIELART Theatre Festival (Munich). She is a Saison Fellow I artist of The Saison Foundation.



© Flavio Karrer



シュウ・ツェユー [台湾] Hsu Che-Yu [Taiwan]

彼・此—かれ／このこと One Another

日時

レクチャー | 2月27日 [日] 16:00

*コモンズフォーラム#2内でリモート上映します。

展示上映 | 2月21日 [月]-25日 [金] 13:00-19:00

休演 | 2月23日 [水・祝]

上演時間

レクチャー | 約40分

展示上映 | 『犯罪現場の再現』(2021年) 21分56秒

『真鴨の異常な死』(2020年) 16分45秒

『シングルコピー』(2019年) 21分17秒

*上記作品をループ上映します。

参加方法

レクチャー |

リアル参加 | 要予約・コモンズパス提示

リモート参加 | パス購入後に送付される専用ページ掲載の
URLよりアクセスしてください

展示上映 |

リアル参加 | 入場無料・予約不要

— 定員: 20名 (場内の人数が定員を超えた場合は、入場制限をさせていただきます)

リモート参加 | パス購入後に送付される専用ページ掲載の
URLよりアクセスしてください

レクチャー

展示上映

リモート参加有

Lecture

Presentation of video works

Online participation

Dates

Lecture | February 27th [Sun] / 16:00

*This work will be shown as part of Commons Forum #2.

Presentation of video works |

February 21st [Mon]- 25th [Fri] / 13:00-19:00

*Days off | February 23rd [Wed]

Performance times

Lecture | approx. 40 min.

Presentation of video works |

“The Making of Crime Scenes” (2021) 21’56”

“The Unusual Death of a Mallard” (2020) 16’45”

“Single Copy” (2019) 21’17”

*The above films will be screened on loop during opening hours.

How to participate

Lecture |

In-person participation | Booking essential. Show
general admission pass on entry.

Online participation | Please access the program via the link
on the dedicated page sent upon purchase of your pass.

Presentation of video works |

In-person participation | Admission free

— Number of places: 20 (If the number of people in the venue exceeds the
capacity, we will limit the admission.)

Online participation | Please access the program via the link
on the dedicated page sent upon purchase of your pass.

台湾の新世代マルチメディアアーティストによる、 動物／人間の接触面をめぐるリサーチプロジェクト、始動。

A next-generation Taiwanese multimedia artist sets in motion
a research project on animal/human contact.

マルチメディア・テクノロジーを活用し新たな映像表現を開拓する
台湾の新世代アーティスト、シュウ・ツェユー。2019年にはヒュー
ゴ・ボス・アジア・アート賞ファイナリストに選出。現在はフランス
のメディアアート研究機関、ル・フレノワにレジデント・アーティ
ストとして滞在しながら、テクノロジーを活用したアニメーションや
3Dモデルを使用した映像などの開発に取り組んでいる。

今回のシアターコモンズでは、シュウの最新作や代表作の上映
プログラムに加え、彼が創作のモチーフとして取り組んでいる動物
と人間の関係性にフォーカス。両者の接触面に派生する事象をリ
サーチし、その成果を独自の映像を交えたオンライン・レクチャー
として発表する。他所の人間だけでなく動物をも飼い慣らしてきた
近代／コロニアリズムの歴史を経由しつつ、人間中心主義をず
らす創作に向けた旅路が始まる。

会場

レクチャー | ゲーテ・インスティトゥート東京

〒107-0052 港区赤坂7-5-56

展示上映 | 台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

〒105-0001 港区虎ノ門1-1-12 虎ノ門ビル2F

上演言語

中国語 (日本語・英語字幕つき)

クレジット

構成・演出 | シュウ・ツェユー

ドラマトゥルク・リサーチャー | ベッティ・イーチュン・チェン

会場協力 | ゲーテ・インスティトゥート東京

助成 | 台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

プロフィール

シュウ・ツェユー (許哲瑜) | 1985年、台北生まれ。メディアと記憶の関
係性にフォーカスしたアニメーションや映像作品を制作。個人および
共同体の記憶を視覚化・構造化する。2020年、ベルギー高等美術学
校修了。国立台南芸術大学造形芸術研究所修士課程修了。現在、フ
ランスのル・フレノワにレジデント・アーティストとして在籍中 (2020年
-2022年)。上海ビエンナーレ (2018年)、ロンドン・デザイン・ビエンナ
ーレ (2018年)、サンパウロ・ビエンナーレ (2021年)、ソウル・メディアシ
ティ・ビエンナーレ (2021年)、ビデオナーレ18 (2021年) 等多くの国際
展へ出品している。

ベッティ・イーチュン・チェン (陳儷均) | 1983年、台北生まれ。ドラマトゥ
ルク、翻訳家。台北とドイツ・ボーフムで英文学と演劇学を学ぶ。2012
年よりフリーランスのドラマトゥルクとして、台湾、香港、ドイツのアー
ティストとのコラボレーションや、台北芸術祭との国際共同制作を行う。
2019年には台北芸術祭と共に新しいコミッションの開発を行った。ま
た、ドキュメンタリーシアターの実践や、ドラマトゥルクに関するレク
チャー、ワークショップなども行う。現在は、ドイツ・ミュンヘンに在住。

Hsu Che-Yu is a next-generation artist from Taiwan who
uses multimedia technology to explore new forms of visual
expression. He was a finalist for the Hugo Boss Asia Art
Prize in 2019. He is currently in residence at Le Fresnoy, a
media art research institute in France, where he is develop-
ing animations using technology and video incorporating 3D
models.

In addition to a screening program of Hsu’s latest and
most well-known films, this year’s Theater Commons
Tokyo will also focus on a motif that he has been exploring
creatively: the relationship between animals and humans.
Hsu has researched phenomena that derive from points
of contact between the two, and presents the results as
an online lecture incorporating his video works. As we
trace the history of modernity and colonialism, which has
tamed animals and people alike, a journey toward a form of
creation shifting away from anthropocentrism begins.

Venues

Lecture | Goethe-Institut Tokyo

7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052

Presentation of video works | Taiwan Cultural Center, Taipei
Economic and Cultural Representative Office in Japan

2F Toranomon Building 1-1-12 Toranomon, Minato-ku, Tokyo 105-0001

Language

Chinese (with subtitles in Japanese and English)

Credit

Concept and direction | Hsu Che-Yu

Dramaturge and research | Betty Yi-Chun Chen

Venue support | Goethe-Institut Tokyo

Supported by Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural
Representative Office in Japan

Profile

Hsu Che-Yu | Born in 1985 in Taipei, Hsu is artist who creates
animation and film works which focus on the relationship between
media and memories. Through these works, he has tried to visualize
and structuralize the memories inside individual and communities. He
is now studying in Le Fresnoy – Studio national des arts contemporains,
Tourcoing, France (2020-2022). He is a laureate of HISK (Higher Institute
for Fine Arts, Belgium) in 2020. Previously, he obtained a master’s degree
from the Graduate Institute of Plastic Arts, Tainan National University of the Arts (M.F.A., Taiwan).
His work participated in Shanghai Biennale (2018), London Design Biennale (2018), the 34th
Bienal de São Paulo (2021), the 11th Seoul Mediacity Biennale (2021), VIDEONALE.18 (2021).

Betty Yi-Chun Chen | Born in 1983 in Taipei, Betty is a dramaturg and
a translator. She studied English literature and theatre in Taipei and
Bochum. She has worked intensively with the Taipei Arts Festival
since 2012, and was invited as dramaturg for the festival’s new
commissions in 2019. As freelance dramaturg, she has worked
with artists and curators from Taiwan, Hong Kong, Singapore and
Germany. Currently, Betty lives and works in Munich, Germany.





© Frederic Duval

演劇的インスタレーション

Theatrical Installation

モニラ・アルカディリ &ラエド・ヤシン [クウェート、レバノン／ドイツ] Monira Al Qadiri & Raed Yassin [Kuwait, Lebanon / Germany]

吊り狂い Suspended Delirium

日時

2月21日 [月]、22日 [火]
15:00-17:00/17:00-19:00/19:00-21:00

2月23日 [水・祝]

12:00-14:00/14:00-16:00/16:00-18:00/18:00-20:00

2月24日 [木]

13:00-15:00/15:00-17:00/17:00-19:00

*30分の作品を、各日の開始時間よりループ上演します。
予約の時間内にお越しいただき、自由にご鑑賞ください。

上演時間

30分 (ループ上演)

会場

SHIBAURA HOUSE 5F
〒108-0023 港区芝浦3-15-4

参加方法

要予約・コモンズバス提示

上演言語

英語 (日本語字幕つき)

Dates

February 21st [Mon], 22nd [Tue]
15:00-17:00/17:00-19:00/19:00-21:00

February 23rd [Wed]

12:00-14:00/14:00-16:00/16:00-18:00/18:00-20:00

February 24th [Thu]

13:00-15:00/15:00-17:00/17:00-19:00

*This 30-minute piece will run on a loop from its first showing of the day.
Please arrive during your reserved time frame and experience the work
at your leisure.

Performance times

30 min. (looped)

Venue

5F SHIBAURA HOUSE
3-15-4 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 108-0023

How to participate

Booking essential. Show general admission pass on entry.

Language

English (with Japanese subtitles)

人間と人形、正気と狂気、現実と妄想。 「宙吊りの錯乱」が詩的言語を生成する、ロボット人形劇。

Humans and dolls; sanity and madness; reality and phantasm.

Presenting a robotic performance where the confusion of midair suspension generates poetic language.

モニラ・アルカディリはクウェート出身、ラエド・ヤシンはレバノン出身のアーティスト。ともにベルリンに在住し、それぞれの出自である中東世界への批評的なまなざしと、サブカルチャーやテクノロジーを混交させたアプローチで、独自の表現を切り拓いてきた。

コロナ危機におけるロックダウン、そしてヤシンの故郷ベイルートを破壊した2020年8月の大爆発。隔離された空間で極限状態に追い詰められた二人の対話から、本作品は生まれた。彼ら自身と飼った猫の頭部を模した3体のロボットは、コロナ禍で錯乱する会話を断片的かつ詩的に語り出す。その動きは、メディア・アーティスト菅野創が手がけるプログラムによって不気味なシンクロをみせる。この「宙吊りの狂気」の感覚は、今なおパンデミックに生きる私たちにいかなる攪乱作用をもたらすだろうか。

クレジット

コンセプト、演出、脚本 | モニラ・アルカディリ、ラエド・ヤシン
ロボットシステム開発 | 菅野創、ピート・シュミット
音楽 | ラエド・ヤシン
ヘッドペインティング | サイド・バルバキ
企画・製作 | ベルリン芸術祭・70周年記念プログラム「Wild Times, Planetary Motions」(キュレーション: ナターシャ・ギンワラ、イェルーン・フェルステール)

[東京公演]

舞台協力 | 株式会社ステージワークURAK
日本語字幕監修 | 戸田史子 翻訳 | 阿部幸
協力 | ゲーテ・インスティテュート東京

プロフィール

モニラ・アルカディリ | 16歳でクウェートから日本に留学し、2010年、東京藝術大学で博士号を取得。自らが育った中東世界への鋭いまなざしと、幼い頃から心酔してきた日本のアニメ文化を混交させた映像やパフォーマンスを創作してきた。その作品は、聖と俗、男と女、死者と生者、善と悪など宗教や社会の中で二分化された事象を攪拌し、独特な悲哀とユーモアによって越境する。近年ではアジア・アート・ビエンナーレ2021など多数の国際展に参加、またあいちトリエンナーレ2019などではパフォーマンス作品も発表。2020年にはミュンヘンのハウス・デア・クンスト(芸術の家)で個展を開催。現在は、ベルリンを拠点に活動。

ラエド・ヤシン | 1979年ベイルート生まれ、レバノン出身。アーティスト、音楽家。2003年ベイルート芸術学院演劇学科を卒業後、ビデオ、音楽、写真、文章、彫刻、パフォーマンスといったさまざまなメディアを使った創作活動を展開。その作品は、大量消費社会のシステムを批評的に利用しつつ、自らの個人的なナラティブや、それらが共同体に占める位置を再検討することによって生み出されている。ベイルートの現代実験音楽フェスティバル、Irtijal Festivalの主宰者のひとりであり、“A” Trio、PRAEDといった音楽グループにも参加、複数のソロアルバムをリリースしている。ベルリン、ベイルート在住。

菅野創(かんの・そう) | 1984年青森生まれ千葉育ち。2013年よりベルリンを拠点に活動。ドローイングロボットや群れロボットを用いたインスタレーションを多数制作。フェスティバル・アルス・エレクトロニカなどの国際グループ展に参加。文化庁メディア芸術祭受賞多数。

Monira Al Qadiri and Raed Yassin are artists from Kuwait and Lebanon, respectively. They live together in Berlin, where, with a critical eye toward their native Middle East and with approaches that blend aspects of subculture and technology, they have pioneered unique expressive forms.

This work was born from the dialogues of two people driven into isolation by extreme situations: the lockdowns of the coronavirus crisis; the huge explosion in August 2020 that destroyed Yassin's hometown of Beirut. The three robots, modeled after the heads of the two artists and their pet cat, move in eerie synchronization, as programmed by media artist So Kanno. Their conversation takes place poetically, fragmentally, thrown into a state of derangement by the pandemic. What disturbing effect will this “midair madness” have on us as we continue to live through these times?

Credit

Concept, direction and script | Monira Al Qadiri & Raed Yassin
Robotic system development | So Kanno, Piet Schmidt
Music | Raed Yassin
Heads painting | Said Baalbaki
Conceived and produced by Berliner Festspiele within the framework of the 70th Jubilee programme “Wild Times, Planetary Motions,” curated by Natasha Ginwala and Jeroen Verstele

[Tokyo Performance]

Stage support | URAK
Japanese subtitles supervisor | Fumiko Toda Translation | Sachi Abe
Supported by Goethe-Institut Tokyo

Profile

Monira Al Qadiri | At the age of 16 Monira Al Qadiri moved from Kuwait to study in Japan, and received her Ph.D. in Intermedia Art from Tokyo University of the Arts in 2010. She works in a variety of mediums, bringing together her early fascination with Japanese anime and her acute insight on the Middle East, where she was raised. Al Qadiri blends phenomena that society and religion have deemed separate — the sacred and the profane, men and women, the dead and the living, good and evil — transgressing these boundaries with her unique sorrow and humor. In recent years, she participated in numerous international exhibitions, including 2021 Asia Art Biennale, and presented performance works at the Aichi Triennale 2019. In 2020, she held a solo exhibition at the Haus der Kunst in Munich. She is currently based in Berlin.



© Yasmina Haddad

Raed Yassin | Raed Yassin (born 1979, Beirut) is an artist and musician. He graduated from the theater department at the Institute of Fine Arts in Beirut in 2003, and since then has developed his conceptual practice through multiple mediums such as video, sound, photography, text, sculpture and performance. Yassin's work often originates from an examination of his personal narratives and their position within a collective history, through the lens of consumer culture and mass production. As a musician, he is one of the organizers of the Irtijal Festival for Experimental Music (Beirut), and has released several solo music albums, as well as part of groups such as “A” Trio and PRAED.” Raed currently lives between Berlin and Beirut.

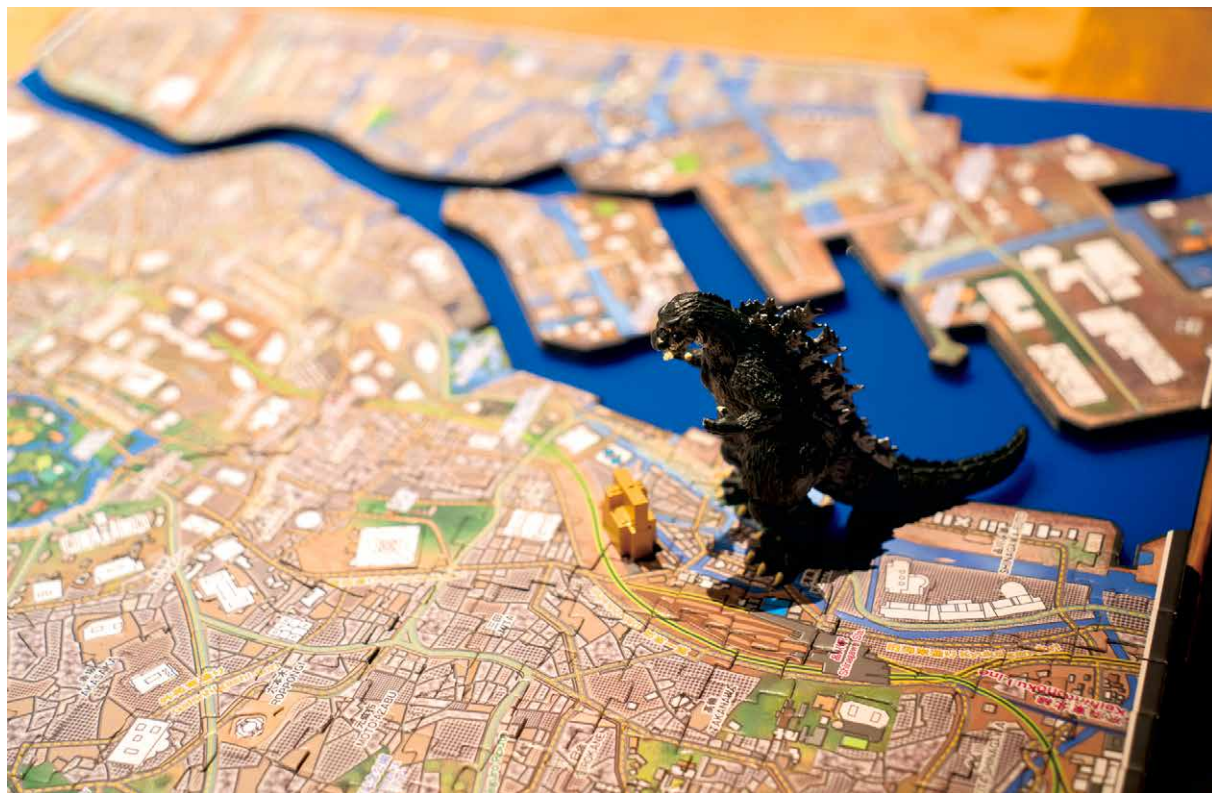


© Tony Elieh

So Kanno | Born in 1984 in Aomori and raised in Chiba, Japan, So Kanno is based in Berlin since 2013. He created various installations using drawing robots and swarm robots. He participated in many international group exhibitions including Ars Electronica and received numerous awards from the Japan Media Arts Festival.



© Martina Kohnova



©Theater Commons Tokyo '21 / Photo by Shun Sato

佐藤朋子 Tomoko Sato

レクチャーパフォーマンス

リモート参加有

Lecture Performance

Online participation

オバケ東京のためのインデックス 第一章 Index for Obake Tokyo: Chapter 1

日時

2月26日 [土] 19:00
2月27日 [日] 13:00/19:00

Dates

February 26th [Sat] / 19:00
February 27th [Sun] / 13:00/19:00

上演時間

約70分

Performance times

approx. 70 min.

会場

SHIBAURA HOUSE 5F
〒108-0023 港区芝浦3-15-4

Venue

5F SHIBAURA HOUSE
3-15-4 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 108-0023

参加方法

リアル参加 | 要予約・コモンズパス提示
リモート参加 | パス購入後に送付される専用ページ掲載の
URLよりアクセスしてください

How to participate

In-person participation | Booking essential. Show general
admission pass on entry.
Online participation | Please access the program via the
link on the dedicated page sent upon purchase of your
pass.

非人間的な視点から都市・東京を語り直す、 レクチャーパフォーマンス、第二弾。

Part two of the lecture performance
reimagining the telling of Tokyo from inhuman perspectives.

土地や歴史の膨大なリサーチを新たなナラティブに再編成し、レクチャーパフォーマンスとして語り直す手法を開拓しているアーティスト、佐藤朋子。複数の物語／歴史の合流地点としてのレクチャーは、彼女の声と身体を経由し、そこにあり得たかもしれないもうひとつのフィクションを生み出す装置ともなる。

シアターコモンズからの委嘱を受け、港区エリアをフィールドとする長期的なリサーチと創作に取り組む佐藤。前回はその「序章」として、1965年に岡本太郎が記した都市論「オバケ東京」を起点とし、映画『ゴジラ』や如月小春の戯曲を引用、戦後の東京と現在を接続した（前作は映像インスタレーション版として、2月4日より開催の恵比寿映像祭にて展示される）。今回はいよいよその「第一章」として、都市で移ろいゆくものたち、「オバケ」に象徴される非人間的な存在をも招き入れながら、新たな都市論としてのレクチャーパフォーマンスを出現させることになる。

Tomoko Sato is an artist reorganizing vast amounts of research on land and history into new narratives, and pioneering techniques of reimagining their telling in lecture performances. Confluences of multiple (hi)stories, her lectures act as the materialization of potential alternative fictions via the artist's voice and body.

Commissioned by Theater Commons Tokyo, Sato has been engaged in longterm fieldwork and creative production in the Minato ward area. She presented the work's *Introduction* at our 2021 edition, taking Taro Okamoto's 1965 urban treatise *Ghost Tokyo* as a starting point and quoting from the movie *Godzilla* and the plays of Koharu Kisaragi to connect post-war Tokyo with the present (Last year's work will be exhibited as a video installation at the The Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions from February 4). We now at last have *Chapter 1*, which will open its arms to the city's fluctuations, to inhuman beings (represented by ghosts), delivering a lecture performance that will double as a new urban theory.

上演言語

日本語

Language

Japanese

クレジット

構成・演出・出演 | 佐藤朋子
舞台協力 | 株式会社ステージワークURAK
製作 | シアターコモンズ

Credit

Concept and direction | Tomoko Sato
Stage support | URAK
Production | Theater Commons Tokyo

プロフィール

佐藤朋子 (さとう・ともこ) | 1990年長野県生まれ、神奈川県在住。2018年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。レクチャーの形式を用いた「語り」の芸術実践を行っている。日本が辿った、いびつな近代化への道のりや、大文字の歴史からこぼれ落ちてしまった出来事が物語る歴史の複数性への関心と、各地に残る伝説や遺跡などへの興味から、作品を制作する。そして、史実の調査過程から浮かび上がる事柄を複眼的につなぎ合わせ、フィクションとドキュメントを行き来する物語を構築する。主な制作に、『しろきつね、隠された歌』（2018）、『瓦礫と塔』『ふたりの円谷』（Port B 東京修学旅行プロジェクトにて上演、2018-19）、『103系統のケンタウロス』（2018）、『MINE EXPOSURES』（2019）、『TWO PRIVATE ROOMS - 往復朗読』（青柳葉摘との共作、2020）。

Profile

Tomoko Sato | Born in Nagano in 1990. Lives and works in Kanagawa, Japan. Received her M.F.A. in Film and New Media from Graduate School of Tokyo University of the Arts. Sato expresses with "narrative," mainly in her lecture-performance which is her main activity. Her recent works include "The Reversed Song, A Lecture on 'Shiro-Kitsune (The White Fox)'" (2018), "Centaurus on Route 103" (as solo exhibition in Gallery Saitou Fine arts, Kanagawa, 2018), "Museum" (as solo exhibition "MINE EXPOSURE" in BITONG POINT, Akita, 2019), "The Debris and Tower," "The Double Tsuburaya" (as part of "New Tokyo Excursion Project" by Port B, 2018-2019) and "TWO PRIVATE ROOMS - A Circle of Reading" (Collaboration with Natsumi Aoyagi, 2020).



Photo: Ryusuke Ohno



Photo: TADA (YUKAI)

ワークショップ

Workshop

Reframe Lab

Reframe Lab×シアターコモンズ共同開発 「名もなきあそび」をつくるワークショップ

Reframe Lab in Collaboration with Theater Commons Tokyo:
Nameless Games Workshop

日時

2月23日〔水・祝〕 10:30-12:30/15:00-17:00

2月27日〔日〕 10:30-12:30/15:00-17:00

*各日2回ずつ、同内容のワークショップを実施します。

上演時間

約120分（休憩あり）

会場

2月23日〔水・祝〕 |
ゲーテ・インスティテュート東京
〒107-0052 港区赤坂7-5-56

2月27日〔日〕 | 芝浦区民協働スペース
〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦 1F

Dates

February 23rd [Wed] / 10:30-12:30/15:00-17:00

February 27th [Sun] / 10:30-12:30/15:00-17:00

*The same workshop will be held twice a day.

Performance times

approx. 120 min. (with intermission)

Venues

February 23rd [Wed] | Goethe-Institut Tokyo
7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052

February 27th [Sun] |
Shibaura Residents' Collaboration Space
1F Minato Park Shibaura, 1-16-1 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 105-0023

物語をつくる力で世界を読み換え、表現の可能性を拓く。 子どもの視点から「あそび」を開発するワークショップ。

Harnessing the power of storytelling to reinterpret the world, pioneering new expressive possibilities
— presenting a workshop that cultivates play from a child's perspective.

人々の豊かな想像力を育む「あそび」や「まなび」を通して、アート、教育、医療、福祉をつなぐプラットフォームReframe Lab。これまで、内なる感情や感覚を表現し、その行為を受け止めてもらえるという安心感がケアにもつながるという観点からプロジェクトを展開してきた。

バンデミックのなか製作したアニメ&絵本『もるめたも』は、自分の体が水になり、鳥になり、虫になり、宇宙の一部にまでなってしまうメタモルフォーゼの物語。自身の変容をあそぶことは、演劇知を活用するダイレクトな試みでもある。

今回、シアターコモンズと共同開発するワークショップでは、横断歩道の白い部分だけを踏むなど、小さい頃に誰もがやってきたような「名もなきあそび」に着目し、固有の物語やルールをもったあそびを子どもたちと開発。そこで生まれたさまざまな動きや表現を大人も一緒に体験してみることで、内なる抽象世界を互いに受け止め合う機会を創出する。

参加方法

無料・要予約

ー対象：小学生とその保護者

ー定員：各回10組20名程度（応募者多数の場合は抽選・港区民優先）

*申込受付終了

上演言語

日本語

クレジット

企画・制作 | Reframe Lab（小澤いぶき、塚田有那、和田夏実、清水聡美、西木戸多紀、岡本真梨子、古屋遥）

会場協力 | ゲーテ・インスティテュート東京、港区

プロフィール

Reframe Lab（リフレイムラボ） | 豊かな想像力を育む「あそび」や「まなび」を開発し、アート、教育、医療、福祉でつながるエコシステムを構築していくプロジェクト。精神科医、キュレーター、エデュケーター、インタープリター、パフォーマンスアーツのコーディネーターなど、さまざまな分野のメンバーが集結し、2018年から活動している。今、目にうつる世界は、見方次第でいかようにも変容していく。Reframe Labは、あらゆる角度から世界を「リフレイム」することをテーマに、さまざまな生命と共にあることへの想像力を育む環境づくりを続ける。

Reframe Lab is a platform that brings together art, education, medical care, and social welfare through forms of play and learning that nurture rich imaginations. They have engaged in a number of projects with the philosophy that providing care involves fostering vulnerability without fear of rejection.

Morumetamo, an animation and picture book produced amidst the pandemic, is a story of metamorphosis in which the body becomes water, a bird, an insect, finally part of the cosmos. Playing with one's own transformations also represents an authentic experiment in utilizing wisdom garnered from the theater.

For this collaborative workshop with Theater Commons Tokyo, Reframe Lab focused on the nameless games — for example, stepping on only the white parts of the crosswalk — that we all played when we were small, teaming up with children to develop forms of play structured by unique stories and rules. With adults joining in on these movements and expressions, the workshop will create new opportunities to accept each other's inner abstract worlds.

How to participate

Free / Booking essential.

ー Intended for elementary school students and their parents

ー Capacity: 10 groups of around 20 people per workshop (in case of high demand, entry will be allocated by lottery. Residents of Minato ward have priority.)

*Applications are closed.

Language

Japanese

Credit

Concept and direction | Reframe Lab (Ibuki Ozawa, Arina Tsukada, Satomi Shimizu, Natsumi Wada, Taki Nishikido, Haruka Furuya, Mariko Okamoto)
Venue support | Goethe-Institut Tokyo, Minato City

Profile

Reframe Lab | Reframe Lab is a project based in Tokyo run by psychiatrists, curators, educators, interpreters, and practitioners from performing arts, building the ecosystem to connect art, education, medical care and welfare since 2018. Their work encompasses playing and learning to create environments that foster imagination to “reframe” the world from different angles.





© Li Yinjun

コモンズ・フォーラム #1 Commons Forum #1

フォーラム

リモート参加有

Forum

Online participation

非同期することばたち ——非同期的ドラマトゥルギーはいかに生成するのか Unsynchronized Voices: How can we generate an unsynchronized dramaturgy?

日時

2月23日 [水・祝] 17:00-19:00

上演時間

120分

会場

ゲーテ・インスティトゥート東京
〒107-0052 港区赤坂7-5-56

参加方法

リアル参加 | 要予約・コモンズパス提示
リモート参加 | パス購入後に送付される専用ページ掲載の
URLよりアクセスしてください

Date

February 23rd [Wed] / 17:00-19:00

Performance times

120min.

Venue

Goethe-Institut Tokyo
7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052

How to participate

In-person participation | Booking essential. Show
general admission pass on entry.
Online participation | Please access the program via the
link on the dedicated page sent upon purchase of your
pass.

すでに2年が経過したパンデミックは、世界中を「強制同期」し続けている。ロックダウン、国境封鎖、ワクチンの供給、それらの措置が生み出す格差や差別に、私たちは一気一憂し右往左往する。そしてこの「強制同期」は巧みに自動化され、即座にクラウド化され、全世界的な管理社会を強化している。

パンデミックがもたらすこうした新たな全体主義に亀裂を入れ、意識的に「非同期する」声をあげ／聴くにはどうしたらいいのか。それには、男性と女性、人間と動物、人工と自然、内側と外側、正義と悪といった単純な二項対立を攪乱し、人間中心的な視座から編まれてきた制度や歴史に水を差すドラマトゥルギーが必要なはずだ。

本フォーラムでは、コロナ禍の2年間で「非同期することばたち」を編み上げてきたアーティストらとの対話を通じて、パンデミック時代の新たなドラマトゥルギーの戦略について議論したい。

上演言語

日本語 (中国語通訳つき)

クレジット

会場協力 | ゲーテ・インスティトゥート東京

登壇者 / Panelists

ウェン・ホイ (文慧) | 中国現代舞踊のパイオニアの一人。振付家、ダンサーであると同時に、ドキュメンタリー映像やインスタレーションの制作も行う。北京舞踏学院にて振付を学び、1989年に卒業。1994年にニューヨークでモダンダンスを学ぶ。1994年、映像作家のウー・ウェングアン (呉文光) とともに中国初のインディペンデント・カンパニー「生活舞踏工作室 (Living Dance Studio)」を設立。ウェン・ホイの作品は、身体がどのように個人的な社会的記録のアーカイブを保持しているかを研究し、身体の記憶がいかに歴史と現実の衝突を引き起こすのかを実験している。『出産 (生育) 報告』(1999) では、女性たちに出産の経験についてインタビューし、身体を抵抗の戦略として用いることで、当時の女性の文化的・日常的な複雑さを表現している。最新作『I am 60』(2021) はヨーロッパの複数の都市で上演。2021年ドイツ連邦共和国の公式な勲章ゲーテ・メダルを受賞。

Wen Hui | Wen Hui is one of the pioneers of Chinese contemporary dance theatre. She is a choreographer, dancer, and she also makes documentary films and installations. She graduated with a degree in choreography from Beijing Dance Academy in 1989, and in 1994, she studied modern dance in New York. In 1994, together with filmmaker Wu Wenguang, she founded China's first independent dance theatre company, "Living Dance Studio." Wen Hui's works research how the body holds an archive of personal social documentation, and experiment with how bodily memory catalyzes collision between history and reality. In her work "The Report on Giving Birth" (1999), she interviewed a group of women about their experiences of childbirth, and used the body as a strategy of resistance to show the cultural and everyday complexity of women during that particular time. Her latest work, "I am 60" (2021), has been performed in several cities in Europe. In 2021, she received the official Order of Merit of the Federal Republic of Germany, Goethe Medal.



©Richy Wong

市原佐都子 (いちはら・さとこ) |
劇作家・演出家・小説家・城崎
国際アートセンター芸術監督



©Flavio Karrer

キュンチョメ | アーティスト
—
Kyun-Chome | Artist



司会 / Moderator

相馬千秋 (そうま・ちあき) |
シアターコモンズ ディレクター
—
Chiaki Soma | Director of
Theater Commons Tokyo



©Yurika Kawano



コモンズ・フォーラム #2 Commons Forum #2

パンデミック時代に問い直す、世界の複数性 ——シアターコモンズ'22から世界演劇祭'23へ Reexamining the Plurality of the World in the Age of Pandemic: From Theater Commons Tokyo '22 to Theater der Welt '23

フォーラム | レクチャー

リモート参加有

Forum | Lecture

Online participation

日時
2月27日 [日] 16:00-18:30

上演時間
150分

会場
ゲーテ・インスティテュート東京
〒107-0052 港区赤坂7-5-56

参加方法
リアル参加 | 要予約・コモンズパス提示
リモート参加 | パス購入後に送付される専用ページ掲載の
URLよりアクセスしてください

上演言語
英語 (日本語通訳つき)

Date
February 27th [Sun] / 16:00-18:30

Performance times
150 min.

Venue
Goethe-Institut Tokyo
7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052

How to participate
In-person participation | Booking essential. Show
general admission pass on entry.
Online participation | Please access the program via the
link on the dedicated page sent upon purchase of your
pass.

Language
English (with Japanese interpretation)

前回のシアターコモンズ'21「孵化／潜伏するからだ」を発展させた企画案で世界演劇祭2023のディレクターに選出された相馬千秋と岩城京子。二人は今、コロナ禍の制限下で新たなキュレーションの倫理や方法について模索を続けている。

本フォーラムでは、現在進行形のシアターコモンズ'22と翌年の世界演劇祭2023をつなぐ思考と対話の場を東京から起動させる。第一部では台湾出身のメディアアーティスト、シュウ・ツェユーとドラマトゥルク、ベッティ・イーチュン・チェンが手がけるオンライン・レクチャーを上映。彼らが動物と人間の関係性をリサーチしながら深めた問いを共有する。第二部では、世界演劇祭2023をホストするムゾントゥルム劇場の共同芸術監督アンナ・ヴァグナーも交え、パンデミック時代に可能な演劇祭の輪郭とその複数性について、それぞれの立場から議論を展開する。

クレジット

会場協力 | ゲーテ・インスティテュート東京

登壇者 / Panelists

アンナ・ヴァグナー | ドイツ、フランクフルト・ムゾントゥルム劇場のドラマトゥルク・共同芸術監督。舞台芸術学を学んだ後、ベルリンの劇場HAU Hebbel am Ufer でダンスのアシスタントキュレーター、ムゾントゥルム劇場でダンス部門長を務めた。ムゾントゥルム劇場では、Eisa Jocson, Paula Rosolen, Jetse Batelaan らのアーティストと活動しプロダクション・ドラマトゥルクとして活動している。Tanzfestival Rhein-Main の共同創始者であり、「Indonesia LAB」(2015) や「This Is Not Lebanon」(2021) 等、多数の国際的プログラムのキュレーションや共同キュレーションを手がけてきた。パフォーマンスアート概念を拡張することに関心を寄せており、「Oper Offenbach」(2018)「The Greatest Show on Earth – A Performance-Circus for the 21st Century」(2016) 等の特別プロジェクトを数多く立ち上げている。

シュウ・ツェユー (許哲瑜) |
アーティスト
—
Hsu Che-Yu | Artist



ベッティ・イーチュン・チェン
(陳怡均) | ドラマトゥルク、翻訳家
—

Betty Yi-Chun Chen |
Dramaturg, Translator



相馬千秋 (そうま・ちあき) |
シアターコモンズ ディレクター
—

Chiaki Soma | Director of
Theater Commons Tokyo



司会 / Moderator

岩城京子 (いわき・きょうこ) | 演劇・パフォーマンス研究。アントワープ大学文学部芸術学科専任講師。演劇ジャーナリストとして活動したのち、2017年にロンドン大学ゴールドスミス校にて博士号 (演劇学) を修め、同校にて教鞭を執る。専門は日欧現代演劇史、及び演劇応用理論。2017年に博士号取得後、アジア・カルチュラル・カウンシルの助成を得て、ニューヨーク市立大学大学院シーガルセンター客員研究員。単著に『日本演劇現在形』(フィルムアート社) 等。共著に『A History of Japanese Theatre』(ケンブリッジ大学出版)、『The Routledge Companion to Butoh Performance』(Routledge出版)、『Okada Toshiki and Japanese Theatre』(パフォーマンスリサーチ出版) など。2021年よりPerformance Research誌共同編集委員。

Kyoko Iwaki | Kyoko Iwaki is a Tenure-tracked Lecturer of Theatre and Performance Studies at University of Antwerp. Her research focuses on Japanese and European theatre of environmental, feminist, and more-than-human philosophies with strong investment in Buddhism. Kyoko obtained a PhD from Goldsmiths, University of London in 2017. After her completion of PhD, she became a Visiting Scholar at The Segal Center, City University of New York. Prior to entering academia, she has worked over a decade as a theatre critic contributing to Asahi Shimbun Newspaper. From 2021, she is an Associate Editor of "Performance Research." Her contribution to publications includes "A History of Japanese Theatre" (Cambridge University Press), "The Routledge Companion to Butoh Performance" (Routledge), "Okada Toshiki and Japanese Theatre" (Performance Research) among others.



Chiaki Soma and Kyoko Iwaki were selected as the directors of the Theater der Welt 2023 with a project proposal developing on the theme of the previous Theater Commons Tokyo '21, "Bodies in Incubation." The two are now exploring new ethics and methods of curation under the restrictions of the pandemic.

This forum will launch from Tokyo a space for thinking and dialogue that will connect this current edition Theater Commons Tokyo '22 with the upcoming Theater der Welt 2023. The first part of the forum will feature an online lecture by the Taiwanese media artist Hsu Che-Yu and dramaturg Betty Yi-Chun Chen. They will share expansions on their research inquiries that emerged from their explorations of the relationship between humans and animals. Anna Wagner, co-artistic director of Künstlerhaus Mousonturm, host of the Theater der Welt 2023, will join for the second part, and participants will share their perspectives on the contours and plurality of theater festivals in the age of pandemic.

Credit

Venue support | Goethe-Institut Tokyo



©Jörg Baumann

©Yurika Kawano

会場

ゲーテ・インスティトゥート東京

〒107-0052 港区赤坂7-5-56
Tel: 03-3584-3201
東京メトロ銀座線・半蔵門線／
都営大江戸線「青山一丁目駅」4（北）出口より徒歩7分

台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

〒105-0001 港区虎ノ門1-1-12 虎ノ門ビル2F
Tel: 03-6206-6180
東京メトロ銀座線「虎ノ門駅」9番出口より徒歩1分
東京メトロ丸ノ内線・日比谷線・千代田線「霞ヶ関駅」
C2出口より徒歩3分
都営三田線「内幸町駅」A4出口より徒歩7分
JR「新橋駅」日比谷口より徒歩12分

リーブラホール／芝浦区民協働スペース

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦 1F
JR「田町駅」東口（芝浦口）より徒歩5分
都営浅草線「三田駅」A7出口・
三田線A9出口より徒歩7分

SHIBAURA HOUSE

〒108-0023 港区芝浦3-15-4
Tel: 03-5419-6446
JR「田町駅」東口（芝浦口）より徒歩7分
都営三田線・浅草線「三田駅」A4出口より徒歩10分

VENUES

Goethe-Institut Tokyo

7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052
Tel: 03-3584-3201
Aoyama-itchome Station (Tokyo Metro Ginza or
Hanzomon Lines / Toei Oedo Line): 7 minutes walk
from 4 (North) Exit

Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan

2F Toranomon Building 1-1-12 Toranomon,
Minato-ku, Tokyo 105-0001
Tel: 03-6206-6180
Toranomon Station (Tokyo Metro Ginza Line):
1 minute walk from 9 Exit
Kasumigaseki Station (Tokyo Metro Marunouchi,
Hibiya or Chiyoda Lines):
3 minutes walk from C2 Exit
Uchisaiwaicho Station (Toei Mita Line):
7 minutes walk from A4 Exit
Shinbashi Station (JR): 12 minutes walk from
Hibiya Exit

Libra Hall / Shibaura Residents' Collaboration Space

1F Minato Park Shibaura, 1-16-1 Shibaura, Minato-
ku, Tokyo 105-0023
Tamachi Station (JR): 5 minutes walk from East
(Shibaura) Exit
Mita Station (Toei Asakusa Line A7 Exit or Mita
Line A9 Exit): 7 minutes walk

SHIBAURA HOUSE

3-15-4 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 108-0023
Tel: 03-5419-6446
Tamachi Station (JR): 7 minutes walk from East
(Shibaura) Exit
Mita Station (Toei Mita or Asakusa Lines):
10 minutes walk from A4 Exit

スケジュール／SCHEDULE

コモンズ・フォーラム
Commons Forum

	2022	2月							
アーティスト／演目	19 SAT	20 SUN	21 MON	22 TUE	23 WED	24 THU	25 FRI	26 SAT	27 SUN
キュンチョメ 「女たちの黙示録」 Kyun-Chome “The Apocalypse of Women”									
ボーハールト／ファン・デル・スホート 「動かない旅」 Boogaerdt/VanderSchoot “TRAVELING WITHOUT MOVING”	19:00-21:00								
市原佐都子(Q) 「妖精の問題 デラックス」 Satoko Ichihara (Q) “The Question of Faeries (Deluxe Edition)”		16:00	18:00	13:00/18:00	14:00				
シュウ・ツェユー 「彼・此―かれ／これのこと」 Hsu Che-Yu “One Another”			展示上映 Presentation of video works 13:00-19:00			展示上映 Presentation of video works 13:00-19:00			レクチャー Lecture 16:00 *コモンズフォーラム#2内で リモート上映します *This work will be shown as part of Commons Forum #2.
モニラ・アルカディリ&ラエド・ヤシン 「吊り狂い」 Monira Al Qadiri & Raed Yassin “Suspended Delirium”			15:00-17:00/17:00-19:00/19:00-21:00		12:00-14:00/14:00-16:00/ 16:00-18:00/18:00-20:00	13:00-15:00/15:00-17:00/ 17:00-19:00			
佐藤朋子 「オバケ東京のためのインデックス 第一章」 Tomoko Sato “Index for Obake Tokyo: Chapter 1”								19:00	13:00/19:00
Reframe Lab 「Reframe Lab×シアターコモンズ共同開発 『名もなきあそび』をつくるワークショップ」 Reframe Lab “Reframe Lab in Collaboration with Theater Commons Tokyo: Nameless Games Workshop”					10:30-12:30/15:00-17:00				10:30-12:30/15:00-17:00
コモンズ・フォーラム#1 「非同期することばたち ――非同期的ドラマトゥルギーはいかに生成するのか」 Commons Forum #1 “Unsynchronized Voices: How can we generate an unsynchronized dramaturgy?”					17:00-19:00				
コモンズ・フォーラム #2 「パンデミック時代に問い直す、世界の複数性 ――シアターコモンズ’22から世界演劇祭’23へ」 Commons Forum #2 “Reexamining the Plurality of the World in the Age of Pandemic: From Theater Commons Tokyo ’22 to Theater der Welt ’23”									16:00-18:30

クレジット

シアターコモンズ '22

シアターコモンズ実行委員会

委員長 | 相馬千秋 (特定非営利活動法人芸術公社 代表理事)
副委員長 | 王淑芳 (台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター長)
委員 | ペーター・アンダース (ゲーテ・インスティトゥート東京 所長)
委員 | サンゾン・シルヴァン (在日フランス大使館 /
アンスティチュ・フランセ日本 文化担当官)
委員 | バス・ヴァルクス (オランダ王国大使館 広報政治文化部・副部長)
委員 | 大館奈津子 (特定非営利活動法人芸術公社 理事)
監事 | 須田洋平 (弁護士)

シアターコモンズ実行委員会事務局

ディレクター | 相馬千秋 (芸術公社)
制作・事務局統括 | 清水聡美 (芸術公社)
制作 | 山里真紀子、芝田遥、谷口裕子、阿部幸 (芸術公社)
制作アドバイザー | 戸田史子 (芸術公社)
企画アドバイザー | 岩城京子、大館奈津子 (芸術公社)
編集 | 柴原聡子、橋場麻衣
編集 (レポート) | 鈴木理映子 (芸術公社)
広報 | 岩本室佳
広報アドバイザー | 若林直子
翻訳 | リリアン・キャンライト、水野響、内山もにか、山田カイル、
春川ゆうき (Art Translators Collective)
アート・ディレクション&デザイン | 加藤賢策 (LABORATORIES)
ウェブデザイン | 加藤賢策、伊藤博紀 (LABORATORIES)
票券 | 木下京子
インターン | 小橋清花、関あゆみ、鄭禹晨、ブルサコワありな、
ルー・エイミ・ティファニー、カメタ・マリアナ、橋場みらん、水野渚
法務アドバイザー | 須田洋平 (弁護士 / 芸術公社)

シアターコモンズ'22 技術スタッフ

舞台監督 | ラング・クレイグヒル
照明 | 山下恵美、帆足ありあ (RYU Inc.)
音響 | 稲荷森健、市村隼人
映像 | 佐藤佑樹 (エディスグロウヴ)
記録映像・写真 | 佐藤駿

シアターコモンズ '22

発行日 | 2022年2月19日
執筆 | シアターコモンズ実行委員会
編集 | 柴原聡子、橋場麻衣
翻訳 | リリアン・キャンライト、水野響、内山もにか、山田カイル、
春川ゆうき (Art Translators Collective)
アート・ディレクション&デザイン | 加藤賢策、和田真季 (LABORATORIES)
デザイン協力 | 望月滉大 (LABORATORIES)
発行 | シアターコモンズ実行委員会
Web: <http://theatercommons.tokyo>
E-mail: artscommons.tokyo.inquiry@gmail.com

禁無断複製・転用 ©シアターコモンズ実行委員会 2022

CREDIT

Theater Commons Tokyo '22

Theater Commons Tokyo Executive Committee

Chairperson | Chiaki Soma (Representative Director, Arts Commons Tokyo)
Vice-chairman | WANG Shu-Fang (Director, Taiwan Cultural Center, Taipei
Economic and Cultural Representative Office in Japan)
Member | Peter Anders (Director, Goethe-Institut Tokyo)
Member | Samson Sylvain (Attaché culturel, Embassy of France in Japan /
Institut français du Japon)
Member | Bas Valckx (Deputy Head Public Diplomacy, Political, Cultural
Affairs, Embassy of the Kingdom of the Netherlands)
Member | Natsuko Odate (Board Director, Arts Commons Tokyo)
Auditor | Yohei Suda (Lawyer)

Theater Commons Tokyo Staff

Executive Director | Chiaki Soma (Arts Commons Tokyo)
Production Manager and Coordinator | Satomi Shimizu (Arts Commons Tokyo)
Project Coordinator | Makiko Yamazato, Haruka Shibata, Yuko Taniguchi,
Sachi Abe (Arts Commons Tokyo)
Production Adviser | Fumiko Toda (Arts Commons Tokyo)
Project Advisor | Kyoko Iwaki, Natsuko Odate (Arts Commons Tokyo)
Editor | Satoko Shibahara, Mai Hashiba
Editor (Report) | Rieko Suzuki (Arts Commons Tokyo)
PR | Sayaka Iwamoto
PR Advisor | Naoko Wakabayashi
Translation | Lillian Canright, Hibiki Mizuno, Monika Uchiyama, Kyle Yamada,
Yuki Harukawa (Art Translators Collective)
Art Direction / Design | Kensaku Kato (LABORATORIES)
Web Design | Kensaku Kato, Hiroki Ito (LABORATORIES)
Ticket | Kyoko Kinoshita
Intern | Kiyoka Kobashi, Ayumi Seki, Ushin Tei, Alena Prusakova,
Amy Tiffany Loo, Mariana Kameta, Miran Hashiba, Nagisa Mizuno
Legal Adviser | Yohei Suda (Lawyer / Arts Commons Tokyo)

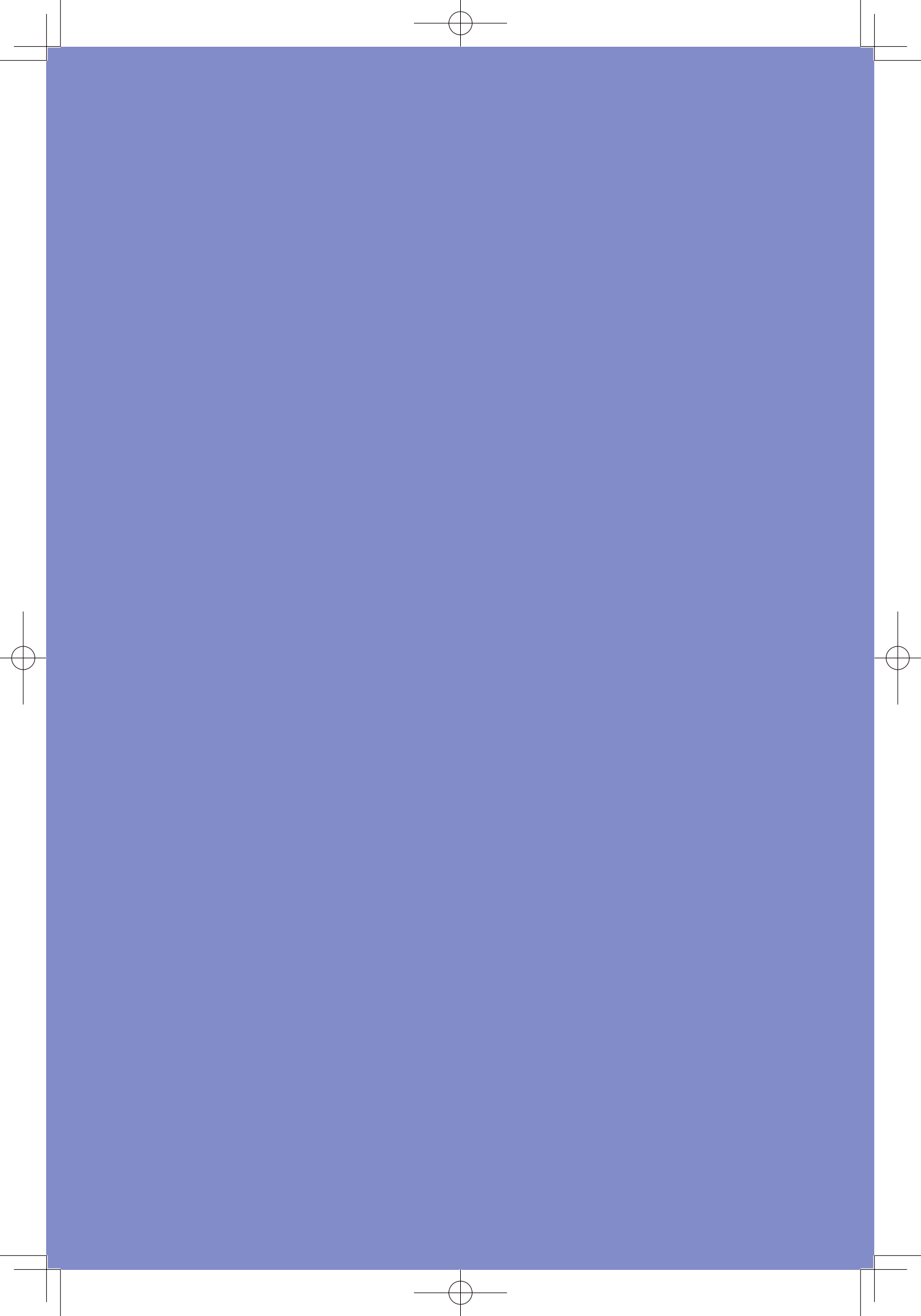
Theater Commons Tokyo '22 Technical Staff

Stage Manager | Lang Craighill
Lighting | Megumi Yamashita, Aria Hoashi (RYU Inc.)
Sound | Takeshi Inarimori, Hayato Ichimura
Movie | Yuki Sato (Edith Grove)
Documentation Video and Photography | Shun Sato

Theater Commons Tokyo '22

Date of Issue | February 19th, 2022
Editor | Satoko Shibahara, Mai Hashiba
Translation | Lillian Canright, Hibiki Mizuno, Monika Uchiyama,
Kyle Yamada, Yuki Harukawa (Art Translators Collective)
Art Direction / Design | Kensaku Kato, Maki Wada (LABORATORIES)
Design Assistant | Kota Mochizuki (LABORATORIES)
Text and Published by Theater Commons Tokyo Executive Committee
Web: <http://theatercommons.tokyo>
E-mail: artscommons.tokyo.inquiry@gmail.com

©Theater Commons Tokyo Executive Committee 2022. All rights reserved.



VOICES

THEATER
COMMONS
TOKYO '22
UNSYNCHRONIZED
VOICES

UNSYNCHRONIZED

THEATER
COMMONS
TOKYO '22
UNSYNCHRONIZED
VOICES